老いを生き 老いを支える | 東京の在宅患者さんたち

1994
作品ナンバー0442

文部省選定

安心して年老いることができる社会を求めて活動した一開業医が現役時代に励行した「在宅ケア」に思いを馳せ、心に残る人々を訪ねていく。ビデオは、在宅ケア改善の一つの引き金となることを願って制作された。在宅医療・地域医療、老人福祉など、誰もが逃れられない高齢化社会の課題を考える。

82歳の宇津宮幸枝先生は、かつて往診した老いた在宅の患者さんたちのことが気になって、訪ねてみることにした。79歳の向後セキさん。家族に見守られているが、心臓の持病があり、最近では目や耳も不自由になって家の中にいることが多くなった。脳血栓などで痴呆症状が出て寝たきりになった小柳ハナさん（85歳）。ハナさんは娘さん一家と暮らしているが、地域の中間施設のショートステイやヘルパー、入浴サービスなどを利用して、家族の生活と介護とを上手に両立させている。

保健婦の衣川さんを訪ねて訪問看護の現状を聞く。訪問看護は、患者さんよりも家族の方が歓迎しないこともあり、外部の人を家に入れることに意外に抵抗感があるという。一人暮らしの老人たちの割合は増えていく傾向にある。西川さん（68歳）は、リウマチで食事作りにも苦労している。そんな一人暮らしの人たちに給食サービスをするボランティア団体がある。この活動の生みの親である高田さん（82歳）は、自身も一人暮らしだ。

老いて自宅で暮らす人たちがいる一方で、病院で暮らす人たちもいる。老人たちの長期入院を受け入れている西川病院を訪ねた。家族自身の老いや住宅事情など、さまざまな理由で社会的入院を余儀なくされる人も多いという。誰もが老いを逃れることは出来ない。しかし、老年期にも自分らしい輝きを持って生きたい。そして老いに向かって確かな生活基盤と心構えを準備したい。

記録
ビデオ
カラー／35分
日・英語版

■ 企画・監修
宇津宮幸枝
■ 協賛
東京都地域婦人団体連盟

スタッフ
■ 製作
福間順子
■ 脚本・演出
中井正義
■ 演出助手
JANET VENTURINI
■ 撮影
中井正義
■ 録音
後藤友輝
■ 選曲
野見祐二
■ 解説
細田百合子